

「障害児との関係のなかでひらかれる意味世界の共有」をめぐる

企画者：田中真理（九州大学） 司会者：田中真理（九州大学）
話題提供者：岡村章司（兵庫教育大学） 廣澤満之（白梅学園大学） 岡澤慎一（宇都宮大学）
指定討論者：浜田寿美男（奈良女子大学・立命館大学） 井上雅彦（鳥取大学）

KEY WORDS: 関係, 意味世界, 共有

【企画趣旨】障害のある子どものふるまいの意味が一見理解しがたいとき、関わり手はそれぞれが拠って立つ理論的背景（発達論、関係論、行動論等）や実践知をもとに、その意味世界を見出そうとする。だが、その後の関わりの中で、子どもにとって意味のある事象や事態を展開できなければ、「意味世界の共有」は、子どもと関わり手の間に成り立つものではなく、関わり手側の自己満足にすぎないことになる。長い時間空間軸の中で子どもとの関わりの様相や関わり深さや多様さという前提なしには、意味世界の共有は成立しないと考える、そのふるまいが示される個別事象を歴史的生活文脈のなかでとらえようとする立場もあるだろう。また、ひとを動かす動機の解明を中心的課題として、その意味世界をとらえようとする立場、ある特質や性能の発生の起源や経路を追究していく立場等もある。これらの立ち位置によって、共有する意味世界は相違がみられるであろう。さらに、その内容がその後の関わり方を規定するならば、「意味世界の共有」は、誰にとってどのような意義をもたらすものを目指すべきであろうか。

本シンポジウムの話題提供者はいずれも実践的研究者である。実践への関わりを志向する研究は、研究を参照する実践（研究的実践）へどのような貢献ができるのだろうか。「貧弱な事例と思いつきの思弁という組み合わせではなく、理論的な新たな視野を提供するような『照明』（無藤, 2013）となる研究方法にも関連した議論を行う。

【話題提供者の趣旨】

1. 岡村章司「行動障害のある子どもへの保護者と協働した行動支援」

行動障害のある子どもの支援を行うにあたり、保護者の支援は欠かせない。子どもが行動問題を示すことで、保護者は自責の念や不安を高めることが多い。しかしながら、保護者の置かれている環境によって行動問題を捉える意味は違ってくるため、何よりも個性を重視しなければならない。そこで、事実をもとに行動問題の機能的アセスメントを行い、行動問題が起こる機能を含めた要因を保護者とともに理解しながら、オーダーメイドな環境整備を含めた支援を行っていく。その事例なりの支援を行う経過の中で、支援者はそれらの行動の見方、子どもを取り巻く環境の不備に気づいていく。保護者は改めて子どもの強みや良さに気づき、自分にとってかけがえのない存在であることを再確認し、併せて自分自身や家族の良さにも気づいていく。子どもは、保護者を含めた周囲からより多くの楽しい恩恵を受けることができるようになる。その前提として、子どもの行動変容が掲げられる。行動問題がまったく改善しない中で、保護者と支援者がその事例なりの独自の意味とともに紡いでいくことは困難である。

しかしながら、これまで筆者は一方的に支援計画を作成し、本人の承諾もなく支援を行ってきた感が否めない。今一度、本人の強みを自覚的に支援の中に取り込んだり、保護者の強みや適切な行動に着目したりすることの重要性を確認したい。

2. 廣澤満之「自閉症スペクトラム児のエコラリアから捉えた係わり手との意味世界の共有」

言語に代表されるように、シンボルが意味をもつためには、コミュニケーションの相手と共同主観が成立している必要がある。自閉症スペクトラム児・者の行動には、Kanner(1943)が指摘するように、一見すると（支援者側が）理解できない「個人的な意味」が含まれるのであれば、係わり手とのズレがより大きくなりやすいであろう。エコラリアは、その典型的な例であり、係わり手が意味を見出さなければ両者の間で「無意味な」言葉になり、時には問題行動とみなされることもある。関係発達論の立場から「意味世界の共有」を考えると、係わり手がエコラリアの機能をどのように理解して、意味を見出し、どのような係わりを企図したのかというプロセスが重要である。これは、保護者の障害理解や支援者の熟達化プロセスにも通じる課題である。自閉症スペクトラム児のエコラリアを基点として、係わり手のあり方を問い直していきたい。

3. 岡澤慎一「重度・重複障害事例との教育的係わり合い—共同性と相互性に視点を置いて—」

当初（X年10月）Nさん（16歳、以下、N）は、食事場面においてスプーンを握らせられれば食物をすくい繰り返して口元へ運ぶことができた。しかし、その動きはたどたどしく、しばらくするとスプーンを放し俯いて体を前後に揺らしたり側頭部を指で突くなどの行動に終始しがちであった。車椅子を押される移動場面においては上体を倒し周囲に視線が向くことが少なかった。筆者は、Nのイニシアチブを保障し行動の意味を見出すことに努め、現在（X+17年5月）まで係わり合いを重ねている。行動には秩序があり、またそれは生命活動の調整（梅津, 1976）上の働きを担うものと考えれば、あらゆる行動には意味があるといえる。Nの行動もこうした視点からとらえることとし、行動を部分的にのみ取り上げ対処の対象とすることはしなかった。一方、係わり合いのなかでNは食事に対してより能動的になり体を揺らすなどの行動は格段に減少した。また、移動時には周囲によく視線を向けるようになった。こうした経過においてNと筆者とは多くのやりとりを重ねたが、それは共同性と相互性の視点（土谷, 2006）から検討することができる。そして、それはNと筆者とが種々の意味を共有したり創出したりする物語でもあった。

【指定討論者の趣旨】以下の観点から討論を行う。

浜田寿美男：ある主体に添って共に生きるもう一人の主体の位置から「共に生きるかたち」を通してのみみえてくる「生きるかたち」が、「この今」の現実を生き抜く道筋をどのように拓きうるものであるのか。

井上雅彦：「発達は望ましい」という観点も「問題行動を治療する」という観点もその危険性を否定した上で、機能分析というツールを使って、現実のシビアな臨床場面で親と本人、学校と本人をどのようにWINWINにするか。

(TANAKA Mari, OKAMURA Shouji, HIROSAWA Mitsuyuki, OKAZAWA Shinichi, HAMADA Sumio, INOUE Masahiko)